
digital-summer wars

lie • gentle

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

digital - summer wars

【Nコード】

N92730

【作者名】

lie・gentle

【あらすじ】

デジタルワールドの危機を救い現実世界に帰ってきた”選ばれし子供達”

この物語は”選ばれし子供”の八神太一と、かつての仲間、そして新たな仲間達との物語。

今、世界を超えた冒険がはじまる

感想くださいっ

お待ちしていますm(_____)m

なんとお気に入り登録をしてくださる方が34名もいらっしゃいました！(1月15日現在)ありがとうございますっ。
もし宜しければ感想もお願い致しますっ！

PV3万アクセス突破！ありがとうございます！

いま、世界を超えた冒険がはじまる

あの夏の冒険を終え、現実世界に帰ってきた太一達。中学生になりそれまでとは違って変わりスポーツだけでなく勉強にも全力で取り組み始めた。全てはあの、出会いと冒険のお陰で……

月日は流れ高校生活2年目の夏、太一は中学からの友人である小磯健二、高校で知り合った佐久間敬のいる物理部に遊びに来ていた。彼らはここ数年で急激に浸透したOZというネットワー^{オズ}ク上の仮想世界のメンテナンスのアルバイトをしていたのだ。太一は彼ら程ネットに詳しくない為、ただ見学という名の暇潰しだった……。

「もう少しだったんだ あと少しで日本代表になれたのに」

「まだションボリしてるの？ いい加減にさあー」

「オイッ、サボってんなよバイト！」

「すいませ〜ん って俺だけかよ」

”物理部”という札の張られた扉の向こうで、愚痴をこぼしている友人に声をかけようとした少年がPCから発せられた注意の言葉にダルそうに返事を返した。

『ははっ、怒られてやんの敬（笑）。』

まあ健二先生は元気出せよ！、代表になれなくても日本でトップクラスの数学者って事は変わらないんだからさ！』

この物語の主人公、八神太一はそんな2人の後ろからPCを覗きこ

みながら笑っていた。

「そうそう！ 気にすんなよ健二、いい加減新しいことに目を向けようぜ？ 夏なんだし やっぱり女だろ！ どう？」

夏の定番はスイカと花火と女だろ！」

「先生をつけないでよ太一、

スイカと花火で充分だよ佐久間。確か去年の夏休みもさ、佐久間がそんなこと言って暴走したせいで……」

「わっ！言つな健二！忘れるアレはっ！」

健二と呼ばれた少年もまたダルそうに答え、それに佐久間が過剰に反応した。

太一は噂の” 去年の夏休み” はサッカー部の合宿で忙しく参加する事ができなかったのだから後から聞いた話でしかないが…

『あゝ、たしかナンパしようとした佐久間がはしやぎ過ぎて、女の子の……』

「言つなつて言つてゐるだろ太一！ あれはもう過ぎた事だ。忘れろつ
！」

どうやら本気で忘れたい過去らしく、全力で首を太一の方に向けてきた。だが先程も述べた通り太一は2人の後ろに居るため……

グキッ！

という音が佐久間の首から発生し……

「つつ！痛てええええええええ！！」

と、校庭にまで響く程の大声をあげた

「『アハハハハッ』」

「笑い事じゃねええ！」

と涙目で睨む佐久間だがその姿はやはり面白く、太一と健二の笑い声はやむことがなかった。

かつてとある世界を救った少年の無邪気な笑顔がそこにあった。

そして少年は新たな仲間と共に、新たな事件に巻き込まれていく…

学園のアイドル！？（前書き）

今回からあとがきに登場人物のキャラ紹介をすることにしました。

では楽しみください。

学園のアイドル!?

タッタッタッタ

ハアハアハア

パリーンッ

ガッシャーンッ!

「あつ、ごめんっ!」

バタバタとした足音が近づいてくる事に太一は気付いた。どうやらすれ違いざまに人がぶつかり合い、何か荷物を落としたらしく、凄まじい音まで聞こえてきたが

『何か割れたな(ボソッ)』

「えっ、何か言った?太一」

『佐久間は聞こえなかったのか?』

「何が?」

誰か走ってくる?」

どうやらPCをいじっている2人には今まで聞こえていなかったようだ。自分はPCを前にしてそこまで集中した事など1度も無い為、集中力の高い2人に尊敬の眼差しを向けていると

ガラッ

ピシャンッ!!

と勢いよく扉が開く音がした。

『……誰？』

「「夏希先輩！？」」

どうやら物理部2人の知り合いらしく、こちらも勢いよく振り返り、
”夏希先輩”という少女と向き合った。

自分には関係の無い人物だと判断した太一は、
（あゝ、そういや1度だけあったなあ、俺がPCの前で本気で集中した事。たしかあれはネットの中に新種デジモンの卵が）
と1人思考の中に入っていてしまった。

「ねえ！バイトしない？」

「今、バイト中ですけど」

「バイト？ 何の？」

「OZのシステムの保守点検ですよ」

「へへ、OZの？ 凄おい」

「末端の末端の末端ですから簡単ですよ」

「へへ、でもOZの？ 凄おい」

「先輩、本当にわかってます？」

佐久間と夏希が会話していて、健二が全く会話に入っていない事に気付いた太一は、

『はじめまして、敬と健二の友達で2年の八神太一です。』
と取り敢えず自己紹介する事にした。

「あつ、はじめまして八神君。3年の篠原夏希です。
キミも物理部なの？」

『いや、俺はサッカー部だよ。今は暇だから遊びに来てるだけ
な？健二！』

と多少強引ながらも健二を会話に入れる事に成功した。

「あつ、うん。そうなんですよ先輩」

「へーそうなんだあ
噂のサッカー部があ
大変だね。」

あつ、ねえ健二君、バイトお願いできないかなあ？」

（面白い人だなあ）

コロコロと表情を変えて話す夏希を見て、太一はそんな感想を抱いた。

ちなみに久遠寺高校サッカー部は先月、他高と試合中に問題を起こ

し活動停止となっていた。

太一が今年の夏休みに暇なのはこれが原因である。

「ごめんなさい？」

僕もOZの保守点検があるんで…」

「ダメかあゝ、バイトって言っても私と一緒に田舎に行くだけなんだけど…」

「ハイっ！俺やります！」

「えっ？ズルい佐久間

じゃあ、ハイっ！僕もやりますっ！」

何故かバイトのあるはずの佐久間が返事をした為、健二までもが夏希のバイトをすと言い出した。

『オイオイ、敬も健二もバイトじゃないのかよ』
と、呆れ顔で言った太一に対し、

「夏希先輩からのオファーなら断れないよ。」

「ぼっ、僕も先輩のバイトの方がやりたいですっ！」

と佐久間は朗らかに 健二は何故か焦った様に答えてきた。

「あははっ ありがとう。」

でも2人じゃ多いかな」

「えっ？」

「募集人員1名なの」

と人差し指を立て、につこりと笑う夏希。

「ということは……」と顔を見合わせる健二と佐久間に向かい、大袈裟な身振りで右手を垂直に下ろす。

「いざっ、勝負っ!」

「悪く思っなよ、健二!」

肩を回してやる気を表している佐久間を見て、友人との決闘が避けられないことを悟った健二は…

過去、佐久間と交わした58回の真剣勝負の全てのパターンから、予想される敵の初手で可能性が高いのはチョキであることを冷酷にも導き出していた。

- - - - -

ブウウン、ブウウウン、むげえんだあいなあゝ
ゆうめのあとのおゝ

バイブレーションの振動音の後、太一の携帯が着信音を唄いだした。

「あつ、ごめんな」

ジャンケンに負けて落ち込んでいる佐久間を慰めている夏希と健二に許可を取り、通話ボタンを押すと

「太一先輩いー！ー！

あそぼおお！！」

まるで小学生の様なテンションで遊びの誘いの電話がかかった。

『唯玖か？今日も元気だなあ。暇だし良いぜ、何する？』

電話の相手は夜威生^{よいせえ} 唯玖^{いく}サッカー部でマネージャーをしている1年だ。

「やったああ！

どこか旅行に行きたいですっ！

日帰りでも良いんで！！お泊まりが良ければ唯玖は勿論お付き合いしますけどっ！」

喋っていないところを見たことの無い、元気すぎる唯玖の声は夏希や健二にも聞こえていたらしく、

うわぁ 絶対、太一（八神君）に惚れてるなあ
と思われていた。

『旅行ったって そんな金ないだろ？』

と金があれば何かしらに使ってしまう太一が呆れた声を出している
と…

「あつ、じゃあ八神君も一緒に来る？」

と夏希から助け舟（唯玖にとって）が渡された。

『えっ？いいのか夏希？募集人員1名じゃなかった？』

「うん、まあでも人手が足りてないのもあるし 2人くらい良い
よ！」

『ありがとうございます』

『唯玖？篠原夏希先輩って知ってる？その人の紹介で田舎に行ける
ことになったんだけど、それでも良いか？』

「篠原先輩ですか！？」

勿論、知ってますよ。学園のアイドルですもんっ！

その篠原先輩と仲良いんですか？」

『いや、まあ今日初めて会ったんだけど誘ってもらったんだ。どう
する？』

「行きますっ！

やったああ！たのしみいい！！」

と交渉は成立した。

ちなみにその様な元気な会話が続けているうしろで
なんとも太っ腹な発言をした夏希に

「えゝ、俺はあゝ？」

「佐久間くんはバイトでしょう？」

「そうそう、僕の方までよろしくね？佐久間！」

「ええゝ、そんなあゝ」

と情けない声を出した佐久間が夏希と健二笑われていたのだが、太
一は知るよしもなかった。

学園のアイドル！？（後書き）

ながみ
name 八神太一
たいち

久遠寺高校2年生

小学校からサッカーをしていて現在もサッカー部所属だが、先月に後輩の起こした暴力事件がキッカで現在活動停止中である。

昔から勉強は苦手だが、苦手なりに努力をするようになった。

勇気と行動力を武器に、以前7人と8体の仲間とともにある世界を救ったことがあり、今でも仲間達とは連絡を取り合っている。

ボサボサ頭にゴーグルは現在も変わらない。

行間1（前書き）

注意！

前話の続きではありません。

カタカナが多い為、読み辛いことがあります。それでもよい方はお読みください。

行間1

デラレタ？

なぜ？

イヤ、リユウ ハ ドウデモイイ。

ツヨクナラナケレバ、イケナイ。

オレハツヨクナリ、”シンカ”シナケレバナラナイ

マダ オレハ ヨワイ。

ツヨクナラナケレバ

「ヨオ、才前ガloveマシーンカ？」

ダレダ？

オマエハ？

「サアナ、俺ガ誰デアロウガ、才前ニハ関係無イダロ？」

カンケイナイ ？

ソウダ、オレニハカンケイナイ
オレガ カンケイスルコト

オレガ スルコトハ

メノマエノ、オマエヲ、タオスコトダッ！

「ナンド？殺ル気力？構ワナイゼ！」

←

←

←

←

←

←

←

「アア、マアコンナモノカ」

……ッ！

ナゼ ソンナニモツヨイ！？

「アア？違ウナ。

俺ガ強インジャ無エ、才前ガ弱インダヨ」

オレガヨワイ……？

ナゼダ ドウスレバツヨクナレル？

「知リタイカ？

ナラ俺ノ言ウ事ヲキケ！ ソウスレバ、強クナレルゾ？」

……ホントウカ？

「アア、嘘ハツカネエヨオ！コノ チュウサイモン様ハナア！！」

行間1（後書き）

n a m e 小磯 健二
（こいそ けんじ）

久遠寺高校2年生
物理部所属

引っ込み思案で内気な性格だが数学に関しては日本でもトップクラスの実力を持つ。
自分の事を何の取り柄も無い男だと思っており、自信をつける為、数学オリンピックに出場するがあと一步のところまで日本代表の座を逃してしまった。

篠原夏希に憧れている。

バイト開始！

あれ？これはデート？（前書き）

あとかきのキャラ紹介は勝手にスペックを付け足しました。

それでは（駄文を）お楽しみください

バイト開始！ あれ？これはデート？

「楽しみですね、太一先輩」

お土産何買おうかなあ。田舎であまりお店がないならあ 駅で買
いましょう？長野県かあ、唯玖は初めてですよっ！初体験ですねえ
、もえますね」

「ああそうだな 朝からそのテンションで大丈夫なのか？」

東京駅へと向かう道、朝から元気な声を出しているのは、夜威生
唯玖だ。

朝の6時30分に太一のマンションのベルを鳴らし、太一がジョギ
ングに出ている事を知ると、太一の妹である八神 ヒカリとガール
ズトークを繰り広げる事にしたらしく、太一が帰ってくる時にはす
でにお菓子を広げ、太一の母親も混ぜて完全に八神家に溶け込んで
いた。

「はあ、お前は見てるだけでも面白い奴だなあ」

「そうですか？ありがとうございますっ！

褒めてますよね？褒め言葉ですよっ？イエイ、褒め殺しだぜえ！
」

朝から唯玖ワールドを展開している唯玖にため息をついてみると、

「おはよう八神君、唯玖ちゃんははじめましてだね」

という声が聞こえてきた。

2人が声のした方に顔を向けると、苦笑いをしながら挨拶をしている夏希が。

『おはよう夏希。バトンタッチな』

「おはようございますっ！篠原先輩！今日はお招きありがとうございますっ！いい天気ですよっ！篠原先輩は快晴と晴れ ではどちらが好きですか？唯玖はやっぱり雲のある…」

取り敢えず唯玖爆弾を夏希に放ってみると

「えっ？えっ？へっ？」

と完全に唯玖に置いていかれてしまっていた。

『（あははっ

唯玖って犬か猫の尻尾生えてたら似合いそうだなあ）』

と考えていると、健二が走ってくるのが見えた。

『よっ！健二おはよう。』

「ハアハア うん、おはよう太一。遅れちゃったかな？」

『いや、時間ぴったりだぜ！流石健二だな。』

と会話を交わし、健二が息を整えてから夏希達の方を見ると…

「へえ〜！、へえ〜っ！！、夏希先輩はマクニナルド派ですかあ、唯玖はやっぱモ×バーガー派ですよ〜、お肉が最高ですもんっ！チキンは神様が作ったお肉なんですよっ！」

「確かに美味しいよね〜モ×のお肉！でもマクニのポテトが私は一番好きだなあ、なんと言ってもあの塩加減だよねっ！」

「ポテトっ！それを忘れてましたよ！確かにポテトはマク×が1番ですよっ！特にニ駅近くのマク×はあ〜」

「そうそうっ！あそこ良いよねえ、神業（塩加減の）をもった店員さんが居るよねっ！」

なんと唯玖の爆マシングントークに夏希がついていつていた。

『すげえ、流石は学園のアイドル（？）』

「太一、それ関係あるかな？」

呆然と会話を聞いている2人に夏希が気付き

「あつ、健二君おはよう」

「すみません、遅れてしまって」

「うつん、時間ぴったり。佐久間君じゃ、こっはいかないわね」

と笑顔で健二を迎えた。

「……………」

「どうしたの？」

無言で夏希を見つめる健二に問いかけると、

「夏っ！ですねー!!」

「ひえっ！？　そうね、夏休みだもんね」

と急に唯玖に匹敵するほどの異常なテンションで夏希に話しかけ始めた。

『（どうしたんだ？健二の奴）』

と太一が訝しんでいると、太一の携帯電話がメールの着信音を鳴らした。

――From 佐久間　敬

言い忘れてたけど健二は夏希先輩の事が好きだから、変に意識してバカやつたらフォローしてやってくれよ――

というメール内容だった。

『（niceタイミング、佐久間）

まあ、挨拶はそれくらいにして、って夏希凄いい荷物だな。

』

「あつ、そうだ。ハイ八神君、健二君。荷物持ち宜しくね。」

「あつハイ、頑張ります。」

『これもバイトの内か？なら仕方無いな』

これまた異常な量の荷物だったが満面の笑みで言われては、断ることもできなかった。

『行きだけで疲れそうだな』

「うん、同感だよ」

『「ハア」』

ため息からのスタートとなったのだった。

バイト開始！

あれ？これはデート？（後書き）

キャラ紹介

name 佐久間 敬

（さくま けい）

久遠寺高校2年生
物理部所属

PCの扱いに長けており、来年の部長候補である

実は彼女持ち

だが篠原夏希のファンでもある。

意外とリア充（笑）

→

佐久間について余り資料が無かった為勝手に作りました。
佐久間ファンの方すいませんm（| |）m

行間2（前書き）

注意！

行間です。

前話の続きではありません。

行間 2

ココガソウカ？

「アア、ソウダ」

ビー、ビー！、ビー！！

ナンダ コノオトハ？

「気ニスルナ、ソレヨリ其処ヲ回セ」

ココカ

マワシタゾ！

「ヨシ、モウスグダ！
アン？」

ドウシタ？

「思ツタヨリ難シイ」

オイオイ、ダイジヨウブナノカ？

「アア、勿論平気ダ。ダガ時間ガ掛カルナ

ヨシ、ソノ間ニ俺様ノplanヲ教エトイテヤル。」

プランダ？

コヲトツパシテ、コワスンダロ？

「ソツチのplanジャナイサ。

ソノ先ニアル、モウヒトツノplanダ」

モウヒトツダア？

キイテナイゾ、チュウサイモン！

「マア怒ルナ。オ前ノ為ノplanダロ？」

ナニ？

「ソウダ 教エテヤル。オ前ガ強クナルplanヲナ」

行間2（後書き）

次話は明日、12時頃投稿予定です。

健二と唯玖の車内暴走！（前書き）

眠かったんです

俺が悪いんじゃない！

テストとバイトが悪いんだっ！

座席順

健一通一夏

太唯一路一

分かりますかね？

では（駄文を）お楽しみください

健二と唯玖の車内暴走！

午前11時44分にあさま521号は東京駅から発車し、現在、太一達は夏希と唯玖が選んで買ってきた30品目バランス弁当を食べているところだった。

「ところでさ、何の日本代表になれなかったの？」

炊き込みご飯を頼張っている健二に夏希が問いかけた。

「えっ！？、何で知ってるんですか？」

「佐久間君が言ってたよ、でも健二君ってスポーツとか苦手そうだね」

自らの想い人にハッキリと言われ、ショックを隠せないという様な顔をした健二だが、夏希は気付かない様子で更に聞いてきた。

「ええと スポーツじゃないですけど、数学オリンピックって言うて…」

「オリンピック！？数学の？、何それ？新種目？」

「いえ、競技自体は50年くらい前からありまして、日本が参加するようになってからも20年近く経ってますよ」

「へー、そんなのあったんだあ」

如何にも初めて聞いた　と言うように感心する夏希。興味がない人々にとっては全く知らないのも当然だ。

「健二君って、数学得意なんだあ？今度勉強教えてよ！

あつ、八神君に時々　先生って呼ばれるのはそれが原因？」

こっそりと夏希が太一達の方を見てみれば、後ろの座席で窓の外を見ながら唯玖ワールド全開でマシニングントークを乱打している唯玖に太一が付き合っているところだった。

一方健二は、夏希のように活発な体育会系からすれば、興味ゼロの話題かと思ったが、文武両道の夏希だからこそ当てはまらないのかと思い直し、ちらりと夏希の顔を見て、

「得意って言うか、他にできるものが無いだけですけど…」

「へえー、ね？何かやってみせてよ！」

「ええっ！？そんな急に？」

と言いながらも楽しそうにしていた。

「じゃあ　先輩、誕生日いつですか？」

「誕生日？」

7月19日、平成4年の。」

瞬間、健二の頭の中を数字と記号が駆け巡った。

「日曜日です。」

「えっ？」

「夏希先輩の誕生日、1992年の7月19日は日曜日です。」

夏希がきょとん、とした。

「ひょっとして全部覚えてるの？日付と曜日」

「いえ、モジエロ演算っていうのを使ったんです。当たりましたか？」

答えには自信があつたため得意顔で訊ねると、夏希はニッコリとした笑顔で

「んー、ごめん。知らないや」

そりゃそうだ。自分が生まれた日の曜日を知っている人は余りいない。

「あははっ、ですよー。夏希先輩は剣道部でしたっけ？全国大会惜しかったですね。」

話題を変えたくなり、文武両道な夏希の話をすることにした。

「んー、私も惜しかったかな」

部活でも良い成績を残し、また部活以外でも生徒会長を務めるなど、

まさに学園のアイドルの夏希だが、恋愛面のみ置いてはあまり武勇伝を聞かない。耳にするのは男子生徒の玉碎記録更新のみだ。

ふと、そのことを思い出し、夏希に恋人の有無を聞きたくなった健二は勇気を振り絞ることにした。

「あ、あのっ！夏っ！な、夏…」

「そういえばね、生徒会メンバーでキャンプに　って何！？急にどうしたの？夏よね、夏休みだし。あれ？駅でもこんなことしなかったっけ？」

夏っ！夏希先輩はっ！かつ、彼　カレーは好きですかっ？」

振り絞ったが言えなかったようだ。
それどころか

「う、うん　まあ普通に好きだけど」

と夏希は気味悪そうに引いてしまい
それきり、2人の間には会話がなくなり、夏希はいつしか座席で寝入ってしまった。

『はあ、何やってんだよ健二』

「ダメだよ？」

言い掛けたなら最後まで言わないと
中途半端が1番格好悪いんだよ？」

不意にそんな声が聞こえ、振り返ってみると太一&唯玖が呆れた顔で見ていた。

「何？その太一&唯玖って？夫婦漫才するときの私達のコンビ名？」

『何に言っただ？唯玖』

急に地の文にツツコミを入れてきた不思議少女唯玖。
その唯玖を不思議に見る太一。

2人合わせてT&I。

「進化したっ！てか変化したっ！！」

『ホントどうした唯玖！？』

「ごめん、なんでもない。それで小磯先輩！ダメじゃないですかっ！」

暫く唯玖の奇妙な発言に固まっていた太一と健二だったが、この言葉で気がつくと、

「あははっ 見られちゃった？、はあ恥ずかしい」とへこみ始めた。

『まあ次のチャンスがあるよ、気にすんな健二。そうだ、今日はエキシビジョンゲームがあるだろ？それでも見て気分変えようぜ！』

「そっか、うんそうだね。」

太一のいうエキシビジョンゲームとはOZの超人気公式コンテンツ
”OZマーシャルアーツチャンピオンシップ”の事だった。

今日はキングガズマというアバターが新記録に挑戦するというので
話題になっているのだ。

「あのアバター凄いですよねっ！とても人間が操作してるとは思え
ないですっ！」

唯玖も知っているらしく、3人揃って携帯電話を覗き込むのであつ
た。

健二と唯玖の車内暴走！（後書き）

キャラ紹介

n a m e 篠原 夏希

（しのはらーなつき）

久遠寺高校3年生

剣道部元主将（現在は引退）

生徒会所属（生徒会長）

容姿端麗、性格美人で学園のアイドルに（男子の八割以上に）認定されている。

彼氏無し

現在もよく告白されるが全員フっている。

陣内家親族一 勝負運が強い。

到着！陣内家！！（前書き）

思ったより物語が進まない（泣）
でもやっと此処まできました。

では（駄文）をお楽しみください。

到着！陣内家！！

おおおお！！！！

長野県に向かっている新幹線、その車内から歓声があがった。

いや、その車内だけでは無い。同時刻、世界中の至る所で大きな歓声があがっているはず。車内のやかましさに驚きながら太一はそう考えていた。

その理由はたった今まで覗き込んでいた携帯電話の中にあつた。いや、正確にはOZと名付けられた電子仮想空間の中にだ。

キングカズマ

OZでマーシャルアーツチャンピオンシップに参加している者なら誰でも　つまり世界中の人間が知っているであろうこのアバターが、今までにない驚異的な速さ、かつ力強さで新記録を叩き出したのだ。

日本一忙しい”み×もんだ”さんも、世界を周っている戦場カメラマンの渡部よいちさんでも今は仕事を忘れてはしゃいでいるだろう。

そんな騒ぎの中、太一は決して睡魔君と喧嘩しない右斜め前の座席に座っている一年上の先輩を見て

『淒え、流石学園のアイドル』

と何故か感心していた。

「いやいや、そこ感心するとこじゃ無いですよ！太一先輩っ！」

♪僕達はあゝここにいるよゝ、そして君が来るのを待っている♪

唯玖の発言に健二が大きく頷いたところで太一の携帯電話が唱いだした。

早速開いてみると着信一件で

———— from 光子朗

お久しぶりです太一さん。暫く連絡できませんで、すいませんでした。やっと成功の目処がたってきたので少し余裕ができ、連絡できました。

あと数日で完成するかもしれませんよ！
それでは失礼します。

————

それはここ一年近く何かを研究＆実験する為に連絡がつきにくくなっていた、かつての仲間からのメールだった。

『（光子朗の奴、何の研究してるんだ？こんなメールする前に少しくらい俺に言ってくれてもいいのにな）』

と拗ねている太一は

「可愛いですっ！」

そう、拗ねている太一は可愛いかった。

ん？

『うわっ！？また急にどうしたんだ唯玖は？』

「よっ、夜威生さん？急に大声出されると耳が痛いんだけどっ」

「ごめんなさい。」

失礼、拗ねている太一はしかし、仲間が元気だという事に嬉しく感じていた。

軽装の夏希&唯玖と全身荷物の健二と太一が新幹線を降りる。

「ところで大おばあさんはおいくつなんですか？」

「今年で90歳になるの、元気なんだよ。」

”平成22年 上田わっしょい”という夏祭りの宣伝の書かれた垂れ幕を横目にしながら、太一達は今回の誕生日会の主役について話をした。

「大正9年生まれですかあ。お元気ですね。」

「最近は少し疲れているみたいだつて親戚の人は言つてたけど、本人は元気だつて。今度、薙刀とか書道の大会とかの審査員をやるように頼まれたとか、こないだOZのメールで言つてた。」

「えっ？OZをやるんですか？」

「そう、私より詳しいくらいよ。」

夏希と健二の会話を聞きながら4人で歩いていると不意に呼び声が聞こえてきた。

「夏希ちゃん？」

同時に声のした方を振り向く4人。

パーマをかけた髪を2つに縛った女性、その女性の子供らしい小さな男の子と女の子が小走りにやってきた。

「夏希ちゃん！」

「典のん子おばさん！」

夏希が笑顔を浮かべ、パーマの女性と両手を合わせる。

「「久しぶり〜」」

女性特有のハモリで再会を喜び合っていた。

――

「もとは武家の出だそうですね、陣内家って。そのせいか大おばあさまってたまに怖いことおっしゃるからビックリしますよ。」

典子おばさんとの再会の後も夏希の田舎”陣内家”に向かっている最中に由美おばさん、奈々さん（叔母）とその子供達とも再会＆合流し現在は騒がしく陣内家に向かっているところだ。

「それで夏希ちゃん？例の子はどっちの子？
って聞かなくても分かるけど…」

大人しく夏希に付いていつている健二と、唯玖とイチヤついている太一とを見比べ、由美と呼ばれた叔母が聞いてきた。

「例の子？」

「え？いやっ　健二君は気にしなくて良いよっ！

あっ、見て健二君！良い天気！」

と急に慌てる夏希に訝しむ健二だが夏希の”気にするな！”というオーラにやられ深く聞く事ができなかった。

「うわあ！見てください太一先輩っ！！おつきいですねえ、立派ですね、興奮しますねえ」

坂を上りきったところで急に唯玖のテンションが（今まで以上に）急上昇した。

ふと前を見てみるとそこには

整地された土の上
瓦屋根の荘厳な門

その奥にはさらに上り坂が続き、屋敷はその先、小高い山の麓に見えた。

体力を振り絞り坂を登り切ると、想像以上に大きな屋敷が太一達を出迎えた。

如何にも由緒正しい日本家屋といった瓦屋根の平家造り、母家らしき一際大きな屋根の奥には、離れの小屋がいくつも見える。広い庭には池まであり、立派な桜の樹までもが悠々と仁王立ちしていた。

『凄え。ゲンナイさん家みたいだ』

「え？ゲンナイさんって誰ですか？」

思わず声に出してしまったらしく、唯玖に聞かれてしまったが、太一はなんでもないと誤魔化し、ただただ健二や唯玖と共に屋敷の大きさに圧倒されるのであった。

到着！陣内家！！（後書き）

キャラ紹介

陣内 典子

（じんのうち のりこ）

37歳。

夏希の祖父の兄弟の息子”頼彦（45）”の嫁。

やんちゃな2人の子供がいる

↓真緒^{まお}9歳・真吾^{しんご}6歳

陣内 由美^{ゆみ}

38歳。

夏希の祖父の兄弟の息子”克彦（40歳）”の嫁

3人の子供がいる

↓了平^{りょうへい}17歳、野球部所属

祐平^{ゆうへい}7歳

恭平^{きょうへい}0歳

陣内 奈々（なな）

32歳。

夏希の祖父の兄弟の息子”邦彦（42）”の嫁

娘^{むすめ}が1人いる

↓加奈^{かな}2歳

やっと此処までできました！
次話ついにあの方が登場しますっ！

恋人！？ 家族を騙せ！（前書き）

疲れた。

恋人！？ 家族を騙せ！

「あのね、ここまで連れてきてから言うのも何なんだけど
ばあちゃんに何を聞かれても、口裏をあわせて欲しいの」 大お

急に夏希がそんなことを言ってきた。

今、太一達は陣内家の門をくぐり（健二が栄の娘を栄と勘違いし、
「90歳のお誕生日おめでとうございます」などと言うハプニング
があったが）無事に件の誕生日を迎える本人。
陣内 じんのうち 栄 さかえの部屋の前まで来たところだった。

『口裏？よく分かんねえけど、分かったよ。』

と太一が3人を代表し分かり辛い返答をした時、

パチンッ

という音が栄の部屋から聞こえてきた。

「誰か居るのかい？お入り」

老女のものと思われる声、しかしどこか凜とした声に導かれ夏希は
障子を開け

「大おばあちゃん！」

「来たかい。」

「逢いたかった！お母さんから元気なくなっちゃたって聞いたけど、身体の調子はどう？」

「ただの夏バテだよ。皆大袈裟に騒ぐから…心配いらないよ」

「よかったあ」

と再会を喜び合っていた

10畳ほどの書斎。碁盤の前に着物を着た老女が座っていた。

老眼鏡を下にずらし、やや上目遣いにした目を細め、夏樹を迎える。細い顎や猫背程度に曲がった腰は高齢を感じるが、目つきや声からは力強いものを感じさせる。

先程のパチンツという音は詰碁をしていた為のようだ。

「おや？あの子達は？」

夏希と談笑をしていた老女がこちらに気づいた。

夏希に手招きされ太一達も部屋に入り夏希の隣に座る。

「この人が陣内栄。私の大おばあちゃん」

「はじめましてっ！夜威生唯玖。篠原先輩の後輩でお誕生日会のお手伝いにきましたっ！」

「おやおや、ありがとう」

『同じく夏希の後輩で八神太一です。お誕生日おめでと〜いませう』

「わざわざすまないねえ、本当にありがとう」

「あっ！はじめまして。おたっ！お誕生日おめでと〜いませうっ！」

「ありがとう。それでどの人が？」

「この人よ、小磯健二くん。約束通り連れてきたでしょ？」

「ええと　夏希先輩とは物理部で「私の彼氏」

……へっ？」

健二の口から間の抜けた声が漏れた。
夏希を見るとニコニコと笑っている。

栄が健二の顔を凝視して、呟く

「彼氏」

「えっ？」

「そう、私のお婿さんになる人」

「おむっ？」

上から栄、健二、夏樹、健二の順の発言である。

「そうかい、健二さん。」

この子は世間知らずでワガママだけど、本当に良い子なんだ。ちゃんと幸せにしてくれるかい？」

「しつ、幸せに……？」

夏希を見るとこっそりとウィンクしている。小さく片手を持ち上げ”お願い”というジェスチャーのオマケ付きだ。

「覚悟はあるかい、と訊いている。」

健二の顔がどんどん赤くなってく、その様子を見て夏希が顔を強ばらせた。

「健二くん？大丈夫？」

「はい」

「本当に？命に変えても？」

栄に凝視され健二はついに真っ赤な顔になり、叫んだ。

「はいっ！絶対に夏希さんを幸せにしますうっ！」

あまりの大声に一瞬、時が止まった。
先程までニヤニヤしながら見守っていた太一と唯玖も驚いた顔で凍りついている。

夏希の顔に至っては少しずつ頬を朱く染めながら固まるという演劇部ビツクリの妙技を披露していた。

「そうかい、よかった」

数刻後、そう言った栄の顔には晴れ晴れとした、曾孫の幸せを願う曾祖母の表情が浮かんでいた。

数分後

健二は夏希に屋敷の裏に呼びだされた。

「ごめんっ！」

夏希が勢いよく頭をさげる。

「あらためてアルバイトの内容を説明するね。実は大おばあちゃんや親戚の前で私の恋人のフリをしてほしいの」

恋人のフリ、つまりは演技で嘘ということ。
そう考えると健二の気持ちは沈んでいた。

「無理ですよっ！絶対無理ですよっ！」

「事情があつて、どうしても彼氏役が必要なの！さっきみたいな感じでいいから！健二君、すごく演技うまいよっ！」

「そっ、それは…」

演技じゃないとは言えない、口が裂けも言えない。不器用なあがり症の健二。

「僕、女の子と付き合つたこともないし！」

「大丈夫、私もそうだから」

「夏希先輩が女の子と付き合つたことないなんて、当たり前じゃないですかっ！」

「えっ？そうじゃないけど　とにかくお願い！」

と夏希に手を握られる健二

「はい」

「じゃあ　よろしくね？」

哀れ小磯健二（１７）

恋人！？ 家族を騙せ！（後書き）

じんのうちさかえ
name 陣内栄

戦国時代から数百年以上続く陣内家16代目当主
もつすぐ90歳の誕生日を迎える

どことなく夏希に似ている。家族を大切にする、一族のトップ

告白！唯玖の過去・上（前書き）

注意

作者に文才が足りない為、展開が急です。

1 行ずつゆっくりとお読み下さい。

それでは（駄文を）お楽しみ下さい

告白！唯玖の過去・上

トントントントンッ

小刻に、リズムのよい包丁の音が響いく。

「皆さん包丁使い巧いですねっ！流石現役主婦ですっ！唯玖も負けませんよおお！」

トントントントンッ！

それ以上に元気な唯玖の声が台所から響いた。

「典子さんっ、勝負ですっ！」

トントントントンッ！

先に夏希の大おばあちゃんへの挨拶を済ましたところで、夏希が健二を連れて何処かへ行ってしまう途方にくれた太一達は取り敢えず当初の目的”お誕生日会の手伝い”をする為にここまでやってきたのだ。

太一もあの冒険以来それなりに料理はできるようになり、時々妹のヒカリに作ってやつたりもしていたが、やはり女の子には適わないらしく、主婦×3&不思議少女のバトルがヒートアップするのを横

目にしながら野菜の皮むき作業をひたすらこなしているのだった。

『（相変わらず元気だなあ唯玖は　でもさっきはあまり元気なさそうだったよな。）』

太一は先程の陣内栄への挨拶に行った時を思い出し、そう思った。確かに唯玖はいつもより格段に口数が減り、おとなしくしていた。

太一はかつて親友の感情の動きに気付かず、その親友を敵に支配され、殺し合いまで強いられた事があった。

それ以来、少しずつ周りの人間の心情を追うようになっていたのだ

『　唯玖、そのバトル終わってからでもいい、話があるんだけど、良いか？』

「太一先輩からのお話ですか？勿論いいですよ！何でしょう？ドキドキですねっ。まさか　告白っ！？」

何故か主婦×3の早さをも超える速度でトトトトトントンッと包丁使いぶりを披露する唯玖に声をかけると、唯玖ワールド展開中の唯玖は、いつも通りの元気な声で朗らかに応えたのだった。

――――

「わおっ！こんな人気の無い所に連れてこられちゃうなんて　　はっ！？やっぱりそういう事ですかっ？」

馬鹿デカい屋敷の人の居ない部屋を勝手に借りて唯玖を呼び出したが、

何だかよく分からない事を言っている唯玖に対し、太一はどう切り出すべきか迷っていた。

だがすぐに、

『（悩んでも仕方ないか、俺は深く考えるの苦手だしな）』

と思い直し、直球勝負をする事にした。

『あのさ唯玖。さっき栄さんに挨拶言った時だけど　　いつの間にか元氣無くなってただろ？どうしてだ？』

何気ない感じで聞こうとした。けれど、

その瞬間

唯玖の表情が固まった。

ただそれだけなのに、部屋まで凍り固まっている気がした。

どこかの廊下から聞こえてくる子供達のはしゃぎ声さえ遠く感じる
固まった表情のまま、眼には少しずつ涙が溜まってきているのが見
てとれた。

少しずつ表情が融けていく

固まった笑顔から

子供の泣き出しそうな表情へと、

「　　なんで？」

なんでそんな事いうんですか？」

それは震える声を抑えようとしているような、少し高い、鼻声で

『何でって、そりゃあ　　元氣無いように感じたからかな』

「元氣あります、ありますよっ？」

唯玖はずっと元氣ですっ、何があっても唯玖は元氣ですよ！
テキトーな事言わないでください」

子供っぽい、幼稚な、根拠の無い言葉で

『でも「元気ですつてば！」

なら何で泣いてんだよ！

「泣いてないっ！泣いてないですよ！」

涙溜まってんだろ！何かあるなら言ってくれよ！力になるから！』

簡単に壊れてしまっ、繊細な、人間らしい感情

「っ！　　なんで。

ひぐっ、　　なんで…」

少しずつ声が小さく、ゆっくりになっていく、
それと共に嗚咽も聞こえてくる。

泣きじゃくる唯玖に太一は戸惑ったが、けれどしっかりと彼女を抱き締めた。

少しでも気が落ち着くように…

告白！唯玖の過去・下

どれほどの時間がたっただろう。
おそらくは数分に過ぎない。

けれど、数分の間太一は確かに唯玖を抱き締めていた。

もしかしたら、何故抱き締めているかは太一自身にも分からなかったかもしれない。

もしかしたら、今にも壊れてしまいそうな彼女を無意識のうちに守りたいと思ったのかもしれない。

抱き締めた理由は分からない。

けれど、唯玖の泣き声と嗚咽は少しずつ収まっていった。

「ありがとうございます。もう大丈夫ですよ」

『ああ 急にごめんな。』

「いえ 嬉しかったです」

少し赤くなり、揺れている眼で、唯玖は本当に嬉しそうな笑顔を浮

かべた。

「気付いてくれた事も、抱き締めてくれた事も　くれた言葉も、
すっごく嬉しかったですよ？」

それは、昨日までよりも幸せそうな笑顔で
嬉しいって感情が伝わってくる笑顔。

真っ直ぐに太ーを見つめてくるその笑顔に太ーは段々、恥ずかしく
なってきた。

「太ーさん、顔真っ赤です」

『うつ、うるさいな。気にすんなよ』

「ふふっ、……」

幸せそうな笑顔の後、唯玖はゆっくりと瞼を閉じた。

1回、2回と静かに深い深呼吸をし、またゆっくりと瞼を開ける。

「聞いてくれますか？私の話。私の過去。私の生き方を。」

開けた瞳はもう揺れてはいなかった。

それは奇しくも、陣内栄と同じ”強い意志を持った眼”をしていた。

「私ね、昔イジメめられっ子だったんです…」

――――

は　はじめまして。
あきはらいく　です。

消え入りそうな声で挨拶をしたのは、今日ここお台場小学校2年3組に転校してきた秋原唯玖。
俯きながらの小さな挨拶は1番前の席の子達でも聞き取れるかどうかという程だった。

「声ちつちやくい」

「もう1回言ってえ」

案の定、後ろの席の子達からはそんな声が聞こえてくる

もう1回、もう1回、……

段々とその言葉を繰り返す生徒が増えてくる。
アンコールのように繰り返されるその言葉は唯玖を怯えさせるものとなった。

先生が止め、席に座るように促すまで唯玖は言葉を発することなく、ただ黙って俯ていた。

それから転校生恒例の質問攻めにも、普段の生活の中でも、唯玖は消え入りそうな程の小さな声しか出せずに過ごしていた。

そして2ヶ月も経たないうちに、唯玖に話しかける生徒は居なくなっていた。

5年の月日が流れた。

唯玖は周りの生徒から無視される存在とされていた。進級するとき
にクラス替えはあった。

進学するときは同じ小学校の子なんか数人しかいなかった。

しかし唯玖自身が変わらなかった為、”無視”というイジメも変わることは無かった。

そんなある日。

父親が死んだ。

突然だった。

仕事の帰り道、若いカップルが運転している自動車に引かれたのだ。
ひき逃げだった。

犯人は捕まったが

唯玖が本音をぶつけられる唯一の存在だった。
その父親が亡くなった。

――

「はい、こんなお話です」
”強い意志を持った眼”で、愛しい人を見るような表情で、唯玖は
そう告げた。

『えっ？それで終わり？』

「あははっ、ヒドいなあ太一さん。そんな大したこと無い様に言わないでください」

『ああ、いや ごめん』

「恥ずかしがりで、友達を作れなかったんです。

大切な人が、家族しかいなかったんです。

でも、お父さんが亡くなった時に”ああ、このままじゃダメだなあ”
”って思ってたんです。

それからは出来るだけ前の自分と違う生き方をしようと思いましたが。

一人称も普段のキャラクターも一転して、お父さんに見せてあげようって。」

この言葉を聞いたとき、ようやく太一は理解した。

友達が出来ない事で心配させていただろう父親を安心させる為に唯玖は変わろうとしたのだらうと。

「それでさっきは 栄さんと夏希先輩を見ていて、ああ家族って良いなあって思っちゃって。少し静かになっちゃいました。」

やはり嬉しそうな笑顔で唯玖は続けた。

「でも、もう大丈夫ですよ？太一先輩が抱き締めてくれたお陰で、力がみなぎってきましたっ！」

イヤッハウ、サタン、スーパードライテンションだぜえ！」

今度は悪戯っ子の様な笑顔で唯玖はそう言ったのだった。

『そっか 唯玖といると飽きないなあ。いろんな表情持ってたんだな。』

「あれ？バカにしています？うわっ、ショックだぜえ。おとおさ〜ん！」

ふざけた様に笑う唯玖を太一はまた抱き締めた。

「はふい！？ えっと太一さん？」

そして一言

『唯玖。俺と付き合ってくれ』

突然の告白

唯玖は急展開過ぎて混乱したが、しっかりと抱き締め返すのだった。

返事の言葉は無かったけれど、
2人は確かに抱き締め合った。

告白！唯玖の過去・下（後書き）

展開急ですよね？

はい、作者の力不足です。
すいませんっした。

あつ、帰らないでっ、
まだ続きますよ！

告白！唯玖の過去・裏

やっぱり覚えていてくれなかったかあ。

太一に抱き締められながら唯玖はほんの少しだけ切ない顔になった。

それは唯玖が中学2年生の頃のお話

――

「お母さん？」

父が死に、悲しみにくれていた唯玖。

「どういう事？　誰なの？」

父親が亡くなって早1年、母は新しい男を連れてきていた。

「唯玖。この人は夜威生勤さん。唯玖の新しいお父さんよ」

母はその男と再婚をするつもりなのだ。

「こんにちは、唯玖ちゃん。本当のお父さんの様に慕ってね。」

父親の様に

その言葉自体が「私はキミの父親では無いんだよ」って聞こえて、

「こんにちは、勤さん」

唯玖はその男を父親とは思えなかった。

勤さんとはその日から一緒に住むことになった。

絵に描いたような、良い父親だった。

唯玖を実の娘の様に愛し、家族を大切にした。
仕事で遅くなるときは必ず連絡を入れてきた。
誕生日にはサプライズもしてくれた。

けれど唯玖は心を開けなかった。

そんなある日の下校時。

『おい、取ってくれえ！』

グラウンド隅の駐輪場に向かう途中で男の子の声が聞こえてきた。

足元にボールが落ちてあるのを見つけた唯玖はしゃがみこみ、ボールを掴み、立って渡す。
という行為を非常にゆっくりと行った。

その動作に深い意味は無かった。

だが、

『お前、悲しそうな目してるな』

「え？」

その男の子は唯玖の感情に気付いたのだ。

父親の振りをする勤さんでも気付かなかった。
唯玖の心の奥に潜む感情にその男の子、八神太一は気付いたのだった。

『何かあったんだろ。俺でよければ話聞かせて？
辛いことでも、苦しいことでも、悲しいことでも、人に話せば少しは楽になるかもよ？。』

「なんで分かったんですか？」

太一の言葉を不思議に思ったのだろう、唯玖は如何にも不思議だ、という表情で聞いた。

『何でだろ そんな気がしたんだ。”誰か助けてえ”ってキミが叫んでる気がした。』

当たり前のように言う太一に、唯玖は何故か少しだけ心を開くことが出来た。

それは太一の言った通り”聞いて欲しい”という感情があったからかもしれない。

「はい、聞いてくれますか？」

『ああ、俺で良ければな！』

力強く笑う太一に唯玖は少しだけ微笑み話し始めた。

「私、昔お父さんが亡くなって、最初お母さんが再婚したんですけど、新しいお父さんに馴染めないんです。

昔から人見知りで、友達も作れなかったし、相談できる人もいないて

話そうと思ったんですよ？話かけようって、友達になろうって！でも、無理でした。

声をかけられないんです。

頑張って近づいても、口を開いても、音にならなくて、本当はもう

嫌なのに、

1人は嫌なのに、

ずっと恥ずかしくて、誰とも話せなかったから、話すキツカケが掴めなくて、

それで誰にも相談できなくて

新しいお父さんは良い人なんですよ？

でもダメなんです。

どうしてもちゃんと話せなくて、

私は昔のお父さんが好きだったから、
大好きだったからっ、

新しいお父さんに馴染めないんです。

馴染めないから友達に相談したくて、

でもその友達も作れなくて、

新しいお父さんに馴染めないから友達を作れないっていう相談もできなくて

ずっとずっとその繰り返しで、病んじやって、

もう疲れちゃいました。」

話しているうちに涙声になったが、無視して話し続けた。

最後には無理やり笑顔を作り、話に付き合ってくれたお礼を言って別れようと思いい口を開いた。

「ふう ありがとうございます。お陰様で

『そっか、辛かったんだな。』

え？」

しかし、優しい表情を浮かべる太一に遮られた。

『今まで誰にも言えなくって辛かっただろうな、話聞いてるだけじゃキミがどれだけ苦しんでたか、全部は分からないけど、きっと誰かに言わなきゃ、言葉にして発しなきゃ、どうにかなりそうなくらい辛くて、寂しかったんだろっ』

全部は分からない

そっさいながらまるで分かっているかの様に話す太一に唯玖は惹かれていった。

『でも、そのままじゃ何も変わらないよな。

昔どんなに恥ずかしがり屋でも、

昔友達が作れなくても、

それは結局昔の事なんだ。

数年前でも、つい昨日でも、昔には変わらない。

な？ だから今を生きてよ。

辛くて悲しい、そんな時は出来る限り今を楽しみましょう？

昔何があっても構いやしない。

だから、

今を生きよう!!』

救われた気がした。

何も知らないはずの男の子に、唯玖は救われた気がしたのだった。

――――

私が変われたキツカケ、もう覚えてないんですね。

でも、私が太一さんに救って貰うのは2回目なんですよ？

太一さんに会いたくて同じ高校を受けたくらい、太一さんに惹かれるんです。

だから 告白の答えはイエスです。
大好きです。太一さん。

告白！唯玖の過去・裏（後書き）

どうでしょう？

私はシリアスは苦手な様です。

読まれた方は感想とアドバイスを下さい（＜|＞。）

心よりお待ちしております。

出会いとバイト！穏やかな常（前書き）

（駄文を）お楽しみ下さい。

出会いとバイト！穏やかな常

「じゃあ皮むきもしてくれてたみたいだし、太一くん達はまだ仕事ないから、散歩でもしてて？」

「行つてきまゝすっ！太一さん。楽しみにしててくださいねっ！」

そう言つて夏希と唯玖は夕食の準備を始めてしまった。

先程まである部屋で唯玖と抱き合っていた太一だが、足音が聞こえてきた途端に弾かれたように離れ、部屋の前の廊下を歩いてきた健二と夏希に何事も無かったかのように対応し（唯玖は始終ニコニコしていたが）今に至るのだ。

『行つちやつたな、じゃあ少しぶらつくか』

セミの鳴き声に包まれる屋敷を夕日が照らす頃、太一達はあてもなく屋敷周辺を散策する為に玄関先に戻ってきた。

玄関先に出ると1匹の柴犬が近寄ってくる。首輪があるがリードはついていないようだ

はっ、はっ、はっ、

と舌をだしては太一達を見上げてまわりついている。

「えっと、どうしよう　　噛まない？」

『　ハヤテ”　って首輪に書いてあるな。はじめましてハヤテ！』

陣内家愛犬ハヤテと遊んで時間を潰している太一達だったが、彼らの耳に車のエンジン音が聞こえてきた。
車体に”町の電気屋さん陣内電気店”と書かれたバンが門をくぐってきたようだ。

車からは白衣を着た老男性とジャンパー姿の中年男性が降りてきた。棒立ちで会釈をする健二、ハヤテと戯れながら会釈をする太一を見て、「誰？」という顔をしている。

『はじめまして、夏希の後輩の八神太一っていいいます。お誕生日会の手伝いにきました。』

「あつ、夏希せんぱ　　なつ、夏希の　　かつ、彼氏の小磯健二です。」

2人の挨拶を聞き、「ああ、なるほど」と納得した2人は笑顔で太一達に近付いて来た。

「キミがかあ、いやああの子が連れてくるっていうからてつきり男

前かと思つてたよ」

「でも頭が良いそうだし、頭脳派なんだなあ　よつと、少し退いてくれ。」

『あつ、手伝います。』

「うん、ありがとう」

「ああ言い忘れたが私は万作、彼は太助だよ」

上から万作、太助、太一、太助、万作の発言である。

太助と太一は蛍光灯の箱を抱え屋敷に入つていつてしまった。

「はあ　頭脳派ですか」

苦笑しながらも健二もしゃがんで恐る恐るハヤテの頭に触れる。すると、

「違う違う、このへんが気持ちいいんだよ。」

万作が健二の手を掴み、ハヤテの首へと移動させた。

「な？」

「はい」

こんなに犬に触れるのはじめてだったが、これだけ年上の人物に手をとつて何かを教えて貰うのはじめてだった。

なんとなく気恥ずかしさを覚えた健二は八二カミながらも返事をした。

ハヤテと戯れているうちに太一は戻ってきたが、それからはまさに千客万来という感じで太一達はその荷物運びに駆り出されるのだった。

「おう！」

「よお！」

陣内水産と書かれたトラックからはランニング姿の老男性。日に焼けた身体からは重量感を感じる。

「こちら夏希ちゃんの後輩の太一さんと、例の健二くん」

「ああん？ほお〜」

大きな発泡スチロールの箱を持ちながら、年季の入った元気な笑顔で

「おう、ぼけつとしてんなら手伝ってくれや」

「『はいっ』」

と要請をいれてくる。

太一達の返事と同時に、サイドカー付きのオートバイが停まる。

「どうも、ご無沙汰しています、叔父さん方。」

ゴーグルを外して頭を下げる男性に

「おう」

「久しぶり」

と水産トラックのランニング男と万助が答える。

サイドカーからは女性が

「こんにちは」

と軽いノリで立ち上がった。

運転手の男に

「拾ってくれてありがと。助かったわ」

と言い、中庭の方に歩き出した。
どうやら庭からあがるようだ。

「よしっ！付いて来な！」

威勢の良いランニング姿の男に従い屋敷に入ると、通路の先では

「うっん、そうじゃなくて。もっとガツてさあ。あ、兄さん、お父さん達通るよ」

先ほどのジャンパー姿の男性が脚立に乗っていた。化粧の濃い中年女性が指示をだし、蛍光灯を取り替えているようだ。

「了平兄ちゃんすげえ」

「勝ったー！」

「やったやったー！」

その男女と会釈を交わし、先に進むと、テレビを囲む女性や子供達が飛び跳ねている。

メガホンをもった由実や真悟、真緒、祐平といった子供達も勢揃いで、庭からは

「何？勝ったの？」

と先ほどのサイドカーの女性も登場し

とにかく全員、大喜び。

かと思えば

「夏希い！どこだ！！フィアンセなんか認めないぞ！！」

と若い男性の怒鳴り声が聞こえてくる。

「ちょっと翔太！うるさいっ！今いいところ何！？このアナウンサー！まさかの準決勝出場って失礼じゃない！」

「俺は許さねえぞ！夏希いい！」

なんとも騒がしいBGMを聞き流しながら（健二はビクビクしていたが）進むと

ようやく到着したようで台所の前で立ち止まった。

「前祝いだ！」

ランニング男の持ち込んだ箱をテーブルに載せ、箱を開けると、中にはギッシリと詰め込まれた大量のスマイカがあった。

「すごい！」

「イカだあ！」

と歓声をあげる女性一同。子供達も駆け寄り、はしゃいでいる。

「おら、もう一つ」

と今度は健二の持ってきた箱を開けさせる

「またイカだあ！」

「沢山あるう」

女性陣は少し呆れ顔だが、子供達はまだ喜び、はしゃいでいる。

「そんでもって、これだ！」

最後に太一が持ってきた箱を開けさせると、

「イカばっか」

ついに部屋の全員が呆れ顔になった。

「わおっ！イカしてるぜえ！おじ様あ！！」

いや、唯玖以外はだった。

出会いとバイト！穏やかな常（後書き）

キャラ紹介

陣内万作（68）

白衣の老男性。栄の息子三男で内科医

万助（70）

ランニング姿の老男性。栄の息子次男。
水産業経営

太助（45）

万助の息子長男。電気店店長

翔太（21）

太助の息子一人っ子
警察官をしている。

理一（41）

真理子の息子長男

オートバイ男。陸上自衛隊所属

理香（42）

真理子の娘長女。

サイドカー女。上田市役所勤務

宜しければ活動報告もご覧ください。

夏の思い出（笑）（前書き）

随分お待たせしてしまっただので投稿します。

作者が風邪ひいてて頭回らないため、後から多少修正いれる可能性があります。

夏の思い出（笑）

「覚えた？」

親戚の集まった大家族の食事に出席した太一、健二、唯玖は食事の最中にその多すぎる人数を1人1人紹介されていた。

「うーん、ちよつとまだ」

『多すぎるからなあ』

苦笑いを浮かべる健二と太一に対し、

「はいっ！覚えましたよっ皆さん！

ふっふっふっ、皆の個人情報は私のものだぁ！」

とよく分からない言葉でテンション高めに発言したのはご存知、不思議少女唯玖だ。

「本当唯玖ちゃん？じゃあテストね？」

と夏希から「この叔父さんは？」「じゃあこの子は？」というテストを出され、簡単に答えていく。

「ほお、東大出の婿殿より記憶力いいねえ」

「ホント！この人数覚えるなんて凄いわ！」

などと親戚練習からお褒めの言葉を貰いニコニコしている。

ニコニコついでに太一の方へ頭を傾け、

「太一さあん！ご褒美に撫でてくださいっ！きゃー、言っちゃったあー！」

などと甘えてくる始末だ。

この2人の関係は、唯玖が台所で調理中に

”神の情報伝達能力を持つ伝説の集団OBACHANズ”に特殊能力”幸せそうな笑顔”を用いながら報告した為、太一が気付く頃にはすでに周知のさたとなっていたのだ。

『唯玖！恥ずかしいだろバカ！』

と言いながらも仕方なく撫でてやると周りからは

「おおーっ！」

という歓声まであがる始末。

「婿殿は夏希ちゃんにやってやらないの？」

などとすでに飲んでいる万助に健二たちは絡まれていたり、

「お前が夏希のフィアンセだあ？認めねえぞ俺は！」

と翔太に怒鳴られていたり、大変騒がしく食事している

が翔

太は、

「健二さんは私が認めた、立派な陣内家の一員よ。」

と栄が言葉を発すれば、腑に落ちないながらも文句は言えず、

「でもよお　又従兄妹の俺に許可なく　そもそも夏希はまだ高校生で」

と小声で延々と愚痴っていた。

『まあ、健二と夏希が好き合ってるのは事実だし、仕方ないだろう？
翔太。』

しかし初対面の太一にまで言われ、また怒りが沸いてきたのか

「うるせえ！つうかテメエは、なに人ん家来てイチャついてんだよ
！逮捕すんぞコラア！！」

もはや只のヤンキーになっていた。

『あれ？唯玖？』

しかし、当の唯玖は太一に寄り添うのを止め、携帯電話とにらめっこをしている。

「　よしっ。はい？呼びましたか太一さん？
いやいや、むしろアナタとかダーリンって呼んだ方が良いですかね

っ！」

太一の呼びかけには早めに答え、いつも通りの笑顔を見せ、また寄り添って来た為、

『（メールかな？）』

と大して気にせずに食事続ける事にした。

「だから目の前でイチャつくな！！」

「無視ですか太一さんっ！むしろアナタ！またはダーリンっ！早くも倦怠期！？」

何とも騒がしい食事に当主・栄は穏やかな笑みを浮かべていた。

――――

食事が終わり、後片付けの手伝いをした後

太一と健二は食後の運動代わりに散歩をしていた。

といっても屋敷の中だが…

『にしても本当でかいよなあ。この屋敷』

「うん、こんな大きな屋敷。維持費はどれだけかかるんだろう
あ、佐久間だ」

どうやら佐久間から電話がかかってきたらしく、健二は携帯電話を
取り出し、耳に当てた。

「もしもし

冗談じゃないよ！

うん、それが恋人役でさ」

どうやら健二はバイト内容を説明しているようだ。

「そつ、そんな訳無いだろ！何いってんだよ佐久間！」

佐久間が非常識な事をいつたらしい。

「えっ、夏希先輩も待ってる？
そうかなあ？」

何を待っているんだろう？

「うん 男ならやるべき。彼氏ならやるべき。」

何をすべきなのだろう？

「うん うん

今こそ漢になるべき、
大人になるべき。

分かったよ佐久間！！」

何故か太一には佐久間の

「洗脳完了！」

と言う声と悪戯っ子のような笑顔が見えた気がした。

『あれ？ここどこだ？』

健二が電話しているのを横目にしながら歩いていると、どうやら道に迷ったらしい。

『家で迷うなんて、どんな屋敷だよ』

苦笑しながら歩いていると、灯りが漏れている部屋を見つけた。

「うん、もう切るよ

あれ？どこ？」

佐久間との電話が終わり、健二もようやく道に迷った事に気づいたようだ。

『迷ったみたいだな。取り敢えずあの部屋に行こう』

太一の見つけた”灯りの漏れている部屋”に向かうとそこには背中を向けPCを操作する少年がいた。

「なに？」

背中越しでも気配に気付いたらしく、付けていたヘッドホンを片方だけ外し肩越しに振り返った

「いや、道？廊下？に迷っちゃって。」

「トイレなら戻って右」

それだけを言いましたPCにむき直す。肩越しにみえたPC画面にはOZマーシャルアーツチャンピオンシップの操作パネルが表示されていた。

『ああ、ありがとう。』

太一がお礼を言ったがもう振り向くことはなかった。

トイレで待っていれば誰か来るだろう

そう思い角を曲がると、廊下の先に灯りが見えた。

ホッと安堵した直後、ドタドタと慌ただしい足音が響く、灯りの見えた方から見て逆の廊下から現れた、裸の子供達が2人の前を走り抜ける。

「待て待て待てええええ え？」

「コラ！まだ拭いてないで へ？」

子供達を追いかけるように唯玲と夏希の声が聞こえた。

子供達を見下ろしていた2人が顔を上げると

夏希、唯玲と目が合った。

子供達と同じ裸の2人と。

「きゃあっ！」

悲鳴をあげ浴室に戻る2人。

バタバタンッ！

「「痛ああ！」」

よほど慌てたのか明らかに倒れる音が聞こえてきた。

『大丈夫かよ？』

「「大丈夫！平気！てかもう忘れて！」」

『（ハモってんなあ）』

どうでも良いことに感想を抱いている太一。

それに対し健二は、

プルルルル ピッ

「もしもし、どうした？何か言い忘れたか？」

「佐久間 僕、この夏を一生忘れないよ」

「はぁ？いきなり何言って…」

プツッ ツーツーツー

と佐久間に電話をかけ、言いたい事だけ言って、勝手に切っていた。

夏の思い出（笑）（後書き）

お疲れ様でした。

感想＆アドバイスを感想欄にお書きください。これは義務です（笑）

はぐれ家族（前書き）

明けましておめでとございます

では（駄文を）お楽しみください

はぐれ家族

「今になって何で!？」

「お前はもう陣内家の一員じゃない!」

「出ていけ!二度とこの家の敷地をまたぐな!」

茶の間まで無事に戻って来た太一達の耳に入ってきたのは、先ほどまで賑やかにしていた家族の罵声の声だった。

嫌な空気という事がビシビシと伝わってくるようで

健二は両親が不仲だった頃を、

太一は仲間内で（特にヤマトと）意見が割れ、激しく討論した時を思い出した

「伯父さん? 佗助伯父さん!？」

太一と健二の後ろから夏希が顔を出し、1人の男性を目に留めると興奮した様子で走りよっていく

「夏希? 夏希かあ、久しぶりだなあ」

侘助と呼ばれた男性に嬉しそうに抱きつく夏希を見て

「えっ！？えっ？へっ？」

と彼氏（役）の健二は戸惑っている

「シシシッ、ん？そっぴや何で勢揃いしてんだ？上田わっしょいが
楽しみでっけか？」

「誕生日だよ。」

おどけた様に言う侘助に万助が答えた。

「誕生日？誰の？」

意外だ　と言わんばかりのキョトンとした顔で返す侘助の言葉に
彼以外の一族が一斉に、かつゆっくりと同じ方向を向いた

「私だよ。おかえり侘助」

一族の主　陣内栄の方を。

「よお　まだしぶとく生きてたか婆ちゃん。なるほどそれでか、納得したぜ」

「そう簡単に死にやしないよ。それより侘助、あんたお腹減ってないのかい？晩御飯ならたった今済ませたばかりだけど、何なら軽食でも　「ああ、いらねえよ」

そうかい」

酒だけは貰うわ　と続け食卓につく侘助に夏希は飼い猫のように懐き。

彼氏（役）の健二を放ったらかしにしていた。

――――

晩酌の後も、侘助と花札を興じる夏希に完全に放ったらかしにされ、犬なら耳を下げクウンと落ち込んでいるだろう健二は今　携帯電話とにらめっこしていた。

知らないアドレスから来た迷惑メールに暗号のような数字の羅列が書かれていたのだ。

「どつした健二？」

一心に携帯電話を見つめる健二に太一が声をかける

「あつ、ごめん太一。起こしちゃった?」

現在の時刻は23時。布団を2つ敷いた客間で寝始め数分がたった時に、健二の携帯からメールの着信音が鳴り出したのだ。

「ああ、構わなねえけど。どうしたんだ? 難しい顔して」

「うん、これ見て」

とディスプレイを太一の方に向ける

「なんだこれ? 迷惑メールか」

「うん、暗号みたいなんだけど難しくて ちよつと僕のバック取
つて貰える?」

「ああ よつと。解くのか?」

太一に取って貰ったバックからレポート用紙とペンを取り出し、暗
号を写しだす健二を見て太一が尋ねた

「うん、ちよつと気になっちゃって」

「それに気分転換につてか?」

にやけながら続けた太一に健二は赤面し

「そ、そんなじゃないけど」

と、とても小さな声で反論した。

「そうか、まあ頑張れよ。おやすみ」

健二が数字に向き合い熱中するのはいつものことなので、特に気にすることなく先に寝ることにしたようだ。

「うん、おやすみ」

健二も返事を返し、本格的に暗号に取りかかり始めた。

それがこれから大変な事件を引き起こす鍵とは知らずに……

はぐれ家族（後書き）

短いすよね
すいません？

でもやっとここまで来ました。

私事です。が今年には社会人になる年の為とても忙しくなります。

しかし今日から一週間一話（以上）更新を目標に頑張りたいと思います。

いつまで続くかわかりませんが、頑張りますのでこれからも宜しく
お願い致します

なお、暫く更新しなかったため文の書き方が変わっている可能性が
ございます

その時はご指摘宜しくお願い致します

愉快犯！？

『ふわああ、よく寝た。』

基本的に太一の朝は早い

部活の無い日でも朝練をする為、中学の頃から朝早くに起きる習慣がついてしまったのだ。

『おはようございます』

間延びした声で茶の間に入っていくと子供達がテレビのリモコン争奪戦をしていた。

『よう、起きてたのか。』

早いな唯玲』

「あつ、おはようございます。太一さん」

慎吾と祐平のリモコン争奪戦を微笑みながら見ていた唯玲に挨拶すると、

ぱああっ！

と擬音が聞こえてくるような笑顔を太一に向け近付いてきた。

『慎吾と祐平はどうしたんだ？』

「あゝ、2人で仲良くアニメ観てたみたいなんだけどね

慎吾くんはCMが入るたびに他の番組にチャンネル廻すんだけど、祐平くんはそれが嫌みたいで慎吾くんがチャンネル廻すたびにアニメのチャンネルに戻してそれをまた慎吾くんが

つてのがヒートアップしたみたい」

唯玲の説明になるほどと納得すれば2人を見飽きたのか はたまた太一の事で頭がいっぱいになった唯玲とイチャつくのだった。

- - -

10分くらい経っただろうか

「あゝ、こいつうー！」

慎吾と祐平2人の声がハモって聞こえてきた。

『ん？なんだ、どうした？』

太一と唯玲が声の聞こえてきた方に顔を向けると

明らかに健二の顔写真と言えるものがテレビ画面に映っていた。

『「えっ!?!」』

それは健二の顔写真だが目線に黒いシール状のモザイクが貼られており

まるで何かの事件の犯人かのように映されていた。

『なんだコレ!?!』

健二　だよな』

「うっ、うん。

そう見えるよね」

「驚くことにこの男、OZのセキュリティシステムに侵入しあらゆるデータを書き換えOZ中を混乱の渦に巻き込んでいるのです。とても若く見えますが、年齢は…」

テレビのリポーターの声を聞いているうちに

「ちよっ!?!ちよっ!?!何? 慎吾くん!?!」

何という早業か、どうやら慎吾と祐平に連れられてきたらしく訳が分からないといった表情の健二が部屋に入ってきた。

「ほらこいつだ！」

「間違えありませんっ！けいれいっ！」

警察の真似事なのか画面に向かって敬礼する子供達

「えっ！？僕？」

うそっ！愉快犯！？なんで？」

「高校生の愉快犯現る！？OZの様子」

画面の右上にそう書かれ

ワイプに映ったコメンテーターからは犯人への批判や状況説明が行われている。

『健二、身に覚えはないのか？』

「こんなことしないよ！

何かの間違いだ！」

「あっコレ観てください！」

唯玲の声に再びテレビ画面を観ると

「ああ　僕の　アバターだ　」

「セキュリティシステムにを突破し、管理システムにハッキングをしたアバター」

そうかかれたテロップの上に映るのは紛れもない健二のアバター”
ケンジ”

を微妙に改良したものだ　　

某国際的キャラクターのネズミのような丸い耳をつけたアバターだがその丸い耳は懸賞で当たったレアアイテムの為、健二以外の利用者で同じものをつかっている者はいないのだ

しかし、やはり丸かったはずの目は狐のように尖り切れ長になっていた。

「　　そうだ！」

暫し唖然としていた健二だが、携帯電話を取り出しOZの認証画面を表示する

「　　あれ？　　なんで！？」

ログインできない！」

2度パスワードを入力するもOZへアクセスできない様子の健二

1日に同じデバイスから3度ログインミスするとロックがかかってしまい、解除するには面倒な手間がかかってしまう為、もう間違えることはできない。

「あつ、そつだ！あの部屋！」

『オイッ待てよ健二！』

太一の制止も聞こえないのかスルーし走り去ってしまった。

「健二先輩何処に行ったんでしようか？」

『昨日PCがある部屋を見つけたんだ。』

つつか俺のケータイ貸りれば良かったのに。』

「そうですね。動転しちゃったのかな

そんな部屋あったんですか」

『ああ、ほら唯玲達の裸見ちゃった時に　あ！』

「あ　あははっ　　やっぱり見えちゃいましたよね」

すっかり雑談に夢中になる太一&唯玲
なんとも緊張感のない奴らだ

愉快犯！？（後書き）

感想、アドバイス宜しくお願いします。

次回の更新は来週の予定です

集合！戦前（前書き）

間に合ったかな？

それでは（駄文を）お楽しみください

集合！戦前

「はあはあはあ
あつた、あの部屋だ！」

広い屋敷に迷いながらも
たどり着いたのは昨日、PCとそれ操作する少年がいた部屋だ

部屋まで全速力ではしる健二

こんなに全力で走ったのはいつ以来だろうか

去年の夏休み、佐久間がナンパした女の子に勢い余って

”特製！常夏のトロピカルジュース（豆乳入り）”をぶちまけたと
き以来だ。

怒り心頭の子から逃げる佐久間に何故か巻き込まれた時のことが一
瞬頭をよぎったがすぐに忘れることにした。

「ごめんっ！PC貸して」

部屋にたどり着くか着かないかという所からもう声を発していた健二

持ち主の少年が席を外していたらどうしようという考えが頭をよぎ
るが、ヘッドホンの少年はPCの前に難しい顔をして座っていた。

「これお兄さんがやったの？」

少年の目の前には名前こそあがっていないが健二を愉快犯とあげ、捜査中という文字や健二自身の顔写真までもがPCの画面に出されていた。

「違うよっ！僕じゃない！」

それよりPC貸してくれない！」

質問の言葉だが、語尾を上げることもなく？ではなく！のついた怒鳴り声となってしまった。

「言い方がダメ

もつと取引先に言うみたいに。」

そのため、わかりにくいダメ出しを受けてしまった

だが、自分の言葉使いに気付いた健二は

現実でのバイト経験もなく、社会人としてのマナーを知らない自分には難し過ぎる注文ではないか？

という疑問を振り払い

なんとか言葉を選び搾り出すことに成功した。

「すつ すいませんが、パソコンをお貸しください」

健二の全力の敬語だった。

「どうぞ」

もういいや、と少年が呆れた表情を浮かべたことにも気付かず、ありがとうと軽くお礼を言っではPCの前に向き直り、早速OZの画面を呼び出す

「くそっ、やっぱりダメだ入れない。」

また2度もログインできなかったようで愕然として画面を見つめている。

「どうしたの?」

「OZのアカウントを盗まれたみたい。」

「あっそ　じゃあやっぱりお兄さんじゃなかったんだ」

「そう言ったじゃん！」

ああどうしよう　あっ、警察にアカウント盗まれたって言えば!」

「普通盗まれないから アカウント売ったんだろ？って言われれば終わりだよ」

「そつだよね うう、どうしよう」

ヘッドホンの少年は

はあ と深いため息をつく

「取り敢えずサポートセンターに連絡」

また呆れ顔を浮かべながらアドバイスをくれた
どうやら手伝ってくれるようだ。

「そつか！ありがとう」

礼を言い、早速サポートセンターに連絡する健二。
しかし、

「ダメだあ、繋がらない」

まるでこの世の終わりというような顔をする健二に

「OZの普及率は凄まじいから どこかで影響してるのかもね」

冷静に物事を見る少年
意外と良いコンビである。

「健二くん？あつ、数馬のところにいたのね！」

健二を呼ぶ声が聞こえてきた。後ろを振り向くと典子が電話の子機を持って立っていた。

「電話よ？佐久間君って子から」

「あつ、ありがとうございます。数馬？」

記憶にない人の名前を聞き、戸惑う健二に

「僕だよ。僕が数馬」

と少年が一言

そういえば今の今までヘッドホン少年の名前を聞いていなかったことを思いだし、自分の慌てぶりに苦笑しながらも電話を受け取った。

「もしもし佐久「何やってんだよ健二！」」

痛ったあ」

いきなりの佐久間の大声に耳を押さえる健二

そんな健二を知ってか知らずかまったく気にしない佐久間

「アレ、本当にお前がやったのか？」

「違うよ！誰かにアカウント取られたんだ！」

「だよな　度胸も動機も無いもんな。特に度胸。」

「うるさいな　無いけどさ。」

「だろうな。」

しかしアカウント取られたのか、じゃあ取り敢えずその電話の番号で仮アバターでも取ってやるから待ってな。度胸なし」

「あのさ、そのあだ名やめてくれない？」

「」

「おい、佐久間」

などとバカ話をしていると

『おっ、やっぱりここにいたか。』

「お邪魔します。何騒いでるんですか？」

太一と唯玲も数馬の部屋に着いた

「お兄さん達、盛り上がってるところ悪いけど仮アバターでOZ行くんですよ？」
早く行こうよ」

一気に部屋が狭くなった気がしたが、緊急時のようだし仕方ないか
と思い直すと行動を促す数馬

やはり一番冷静なのは彼かもしれない

集合！戦前（後書き）

n a m e 夜威生 唯玖

（よいせえ いく）

久遠寺高校1年生

サッカー部マネージャー

たこ焼きが好きだがタコが嫌いという少し変わった女の子。嫌いな物は野菜。

過去に苛められていた事があるらしく、今はその反動で異常なまでに元気な性格をしている。

現在、母親と再婚した父親と妹の4人家族

これ貼るの遅れました。オリキャラなのにすいません？

それでは感想、アドバイスお待ちしてます

寒くて指動かん（泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9273o/>

digital-summer wars

2011年10月8日08時05分発行